～シリーズ～「JICA で働く人たちのヒューマンストーリー」

■第２回■　山本　夏子さん（ブラジル事務所　企画調査員）

■山本夏子さん　（ブラジル　サンパウロ市にて）

“出産直後に「長くは生きられないかもしれない」と宣告された我が子。
初めて抱いた時、小さな手が母親の指をギュッと、驚くほど力強く握り、それまで閉じていた目がパッと開いた。その姿を目にしたとき、母親としての自覚が一気に芽生え、号泣した。
深い悲しみが、我が子を守り抜こうとする強い決意に変わった瞬間だった。”

2021 年 6 月に JICA ブラジル事務所に赴任した山本夏子さん。愛嬌に富み、ラテン的な陽気さの裏には、娘と共に試練を乗り越えた末に得られた芯の強さがあった。

名古屋生まれ、埼玉育ち。
物書きの父、読書家の母と５歳上の姉。３人が本を読む傍ら、たった一人外で遊ぶのが好きな、活発な少女だった。
成長するにつれ、自分を表現することの喜びを知ると同時に、自分らしくいることが認めてもらえる環境でないと息苦しかったという。
「中学校の厳しい校則に疑問を持ち、校則や制服のない高校を受験しました」と語る。
高校時代は吹奏楽部に入り、中学で始めたトロンボーンを続けた。正月以外はトロンボーンの練習をするほど没頭し、著名な先生にも師事。
その後、美大を受験したが、希望する工芸デザインではなく、恩師に進められるまま映像学科を選んだことを悔やむことになる。大学時代は勉強に身が入らず、映画鑑賞に明け暮れたり、舞台に上がって芝居をしたり、バンドを組んでベースを弾いたり、バックパックを背負ってアジアを放浪したり、思いつくことは何でもした。
「とても苦しい時期でした。『自分探し』をしていたのだと思います。」と当時を振り返る。
卒業後は民間企業に就職したが、いつしか海外に行きたいという思いに動かされ、退職してアルバイトをしながら日本語教師養成講座に通った。
「すごく疑問だった中学校の校則と同じく、高校卒業したら大学入学、大学卒業したら就職って、全て横並びに管理されているようで苦しかった。そんな社会から飛び出したいと思っていたんです」と当時の心境を説明する。
その願いに応えるかのように、運命的な再会が山本さんの将来を方向付ける。

日本語教師の資格取得直後、久しぶりに訪れたバリ島のバンガローで、偶然隣に泊まっていたのが、中学３年の時に仲の良かった同級生だったのだ。東京で改めてこの友人と落ち合った時、JICA 専門家の父を持つ彼女に突然連れていかれたのが、青年海外協力隊の説明会だった。
「それまで JICA との縁はなく、まして青年海外協力隊への参加を考えたこともありませんでしたが、『こんな世界もあるのか！』と衝撃を受けました」
申し込んだ結果、合格。中米エルサルバドルに日本語教師として派遣されることになった。

「合格通知を手にした時の感動は今でも忘れられません。夢が現実になった瞬間でしたから。JICA は私に世界への扉を開く鍵をくれたんです」
山本さん 27 歳の春のことだった。
エルサルバドルは「生まれて初めて呼吸が楽になったような自分らしくいられる場所でした」と言う。
誰もが自分の意見をはっきり口にし、多様性が認められる社会がそこにはあった。また、貧しいながらも海外留学目指して熱心に勉学に励む尚学心の高い学生たち、真剣に政治のこと、国のことを語り合う現地の同世代の友人たちを目の当たりにして、意識的に生きることを教えられた。
その後メキシコでスペイン語能力を磨いたあと、JICA のボランティア調整員（現「企画調査員（ボランティア）」）としてボリビアに赴任。そこでは、中米と全く異なる文化を持つ別のラテンアメリカと出会えたという。
国違えば景色も国民性も異なる。「『ラテンアメリカ』を一括りとして見てはいけない」豊かな多様性を持つ中南米の国々を知り、そう学んだ。

ボリビアでの任期終了後、ラテンアメリカ映画好きが高じて、日本で毎年開催されるラテンアメリカ映画祭に関わる仕事に就いた。その縁でアルゼンチン人のパートナーと出会い、アルゼンチンへの移住を決意。ほどなくして妊娠した。山本さん 37 歳の時だった
願った通り、お腹の子は女の子だと分かり、幸せの絶頂期と思われた。
しかし、その先には大きな試練が待ち受けていた。

出産の日、赤ちゃんは産声を上げることなくすぐさま新生児集中治療室へ運ばれた。保育器の中に横たわる不思議な姿の赤ちゃんを呆然と眺める山本さんに、医師は非情にもこう告げた。「赤ちゃんには障がいがあり、長くは生きられないかもしれない。たとえ生き延びられたとしても、自分の足で歩くことはできないだろう」
今振り返っても、山本さんにとって幸せなはずの娘誕生のあの日は「人生で最悪の日だった」と言う。
頭蓋骨や顔面骨の形成に異常が認められる「アペール症候群」、15 万人に 1 人の割合で発症する、非常にめずらしい難病だった。
「ショックが大き過ぎて、涙も出なかったんです。誰か他の人の現実を聞かされているような感覚でした」

しかし、出産 2 日後、保育器から出してもらい、初めて我が子を胸に抱いた時のこと。
「小さな手が私の指をギュッと、驚くほど力強く握り、それまで閉じていた目がパッと開いて私を見つめたんです。『ママ、今までどこにいたの？』って。その姿を目にしたとき、自分の中で母性が爆発したように溢れ出て、そこで初めて号泣しました」
深い悲しみが、我が子を守り抜こうとする強い決意に変わった瞬間だった。
その一か月後のこと。
入院中の娘の異変を感じて医師に相談するも、「大丈夫、お母さんもいい加減に寝なさい」と言われたが、虫の知らせで、娘の枕元に座り、寝ずに様子を見守った。すると、夜中過ぎに娘の呼吸が突然まばらになり、遂に息をしなくなった。みるみるうちに、娘の全身が紫色に変わっていった。大声で「Socorro！（助けて）」と叫んで廊下に飛び出した。
娘は駆けつけた医師らにすぐさま ICU へ運ばれた。薄暗い廊下で待つこと数時間。人工呼吸器の装着が間に合ったため一命をとりとめたが「間一髪だった」と告げられ、安堵から床に崩れ落ちて泣いた。
その時「誰になんと言われようと、私は私の本能を信じよう。そして決して娘のそばから離れない」と誓った。

■愛娘リラと共に（アルゼンチン、コロンにて）

その後も親子共に試練の連続だった。
頭蓋骨の形成異常を矯正する 8 時間以上の大手術や、延長器をつけての治療。その都度痛みを伴い、幼い体には生々しい傷跡が増えていった。
顔面骨延長術を行った時は、延長器を直接頭部にボルトで固定したが、金具が緩むこともあり、医師より「お母さん、ねじを回してください」と言われ、ねじを回した時の「ボルトが娘の頭に入る感触が今でも指先に残っていて、忘れられません」と言う。

当時、山本さんは寝る時間すら確保できず、肉体的にも精神的にも限界の日々だった。しかし、手術のたびに、痛みも不便さもあるはずの娘は、一度たりとも文句も弱音も吐かなかったという。娘のその強さのお陰で、8 歳になるまで計 16 回の手術に共に耐え抜いた。

こうして治療が節目を迎えると、山本さんは JICA の企画調査員として再び現場に戻ることを考えるようになり、2019 年に JICA の公募に手を挙げた。最後の派遣から 15 年のブランクがあり、かつ障がいのある娘同伴の赴任を譲れない条件としたため、果たして JICA が再び迎え入れてくれるか疑問だったが「自分に限界を設けたくなかった」と言う。コロナ禍で公募は一旦中止となったが、2020 年 12 月、山本さんの不安をよそに、JICA からブラジル事務所へ派遣の打診が届いた。
「JICA は娘の事情に配慮し、どの拠点への派遣がよいか考えて下さったと思います。とても感謝しています。」と語る。

■料理好きから始めたお教室で生徒のみなさんと（アルゼンチン、ロサリオの自宅にて）

こうして 2021 年 6 月、山本さんは娘と共にサンパウロに赴任した。
山本さんはブラジルで「日系社会、日系人は面白い！」ことをボランティアたちに伝えたいと望む。

「日系社会の持つポテンシャルを更に高めることができるようなボランティア事業を、隊員の方たちと共に楽しみながら実現していきたい。」と抱負を語る。

「日本の外で暮らしたこの 20 年間で、文化的背景の異なる多国籍の人々との出会いを通じて、多様な価値観の中で自分が信じるより良いものを選び、取り入れていく自由と責任を学び、娘と歩む人生の中で、人と異なることを恐れずに生きていく勇気と大切さを教えられたと思います」と山本さんは言う。

娘の治療のため日本を訪れた時のこと、通りがかりの子供らが娘を指して「モンスター！」と心無い言葉を浴びせてきたことがあったという。一緒にいた親も見て見ぬふりで大変驚いた。「ラテンアメリカでは「この子どうしたの？」と多くの子供たちが娘を見て聞いてくる。そしてきちんと説明すると、納得して一緒に遊び始める。日本にはまだ足りない『異なるものへの寛容性」が、人種の坩堝であるラテンアメリカにはあると感じる決定的な場面です」と語り、「だからこそ隊員活動を経験した方には、地球が多様性に満ちていること、それを尊重し合い平和に共存することが私たちにとって一番大事な課題だという認識を、今後ますます多文化共生社会となる日本へ是非持ち帰って欲しいです」と言う。

若い頃の経験や娘と過ごした壮絶な日々を思えば、山本さんの言葉には計り知れない重みが感じられる。

「協力隊に参加したおかげで今の私がいて、とても幸せです。世界を知るきっかけをくれるこの事業に、微力ながらも貢献したく戻ってきました。コロナを乗り越えて多くの人に協力隊に参加していただき、世界へ飛び出して欲しいと思っています」と熱く抱負を語る。

■山本夏子（やまもと・なつこ）
愛知県名古屋市生まれ。獅子座。2021 年 6 月に娘と共にサンパウロ着任。JICA ブラジル事務所のボランティア班所属。趣味は映画とモノづくり（縫物、織物、編み物・・・）。人生のモットーは「幸せは私の心が決める」。

※～シリーズ～「JICA で働く人たちのヒューマンストーリー」では、ブラジルで国際協力に携わる JICA スタッフを紹介します。仕事面のみならず、これまでの人生や家族の様子、エピソード等も交えつつ、「人」としての姿にスポットライトを当てることで、ありのままの姿をお伝えします。